特 集

持続可能なランドスケープと農業

Sustainable Landscape and Agriculture

－生産から消費まで－

- From Farm to Table -

重要文化的景観や農村観光など，農村の環境や景観についての関心が高まってきている。一方でそれらの対象地となる農村地域では過疎化が進行し，耕作放棄が増えるなど農業景観そのものが維持できない状況が生まれている。農業景観は農業という生業の姿であるといえるが，生業が維持できなくなっている以上，農業景観を表層的なカタチとして議論することに限界がきていると言えよう。

農業にまつわるもうひとつの問題は，環境との関係である。現在の農業は近代化され，化学的に合成された肥料および農薬，外からの石油由来のエネルギーを大量投入することなどにより成り立っていることが多い。また地域の環境と切り離され工業的に作られた種や単一栽培により生物多様性の減少も引き起こしている。

これは環境的側面の問題だけではない。例えば重要文化的景観はその定義を「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」としているが，上記のように農業景観はすでに「当該地域の風土により形成された」ものではなくなっている。そうした中で表層的な農業景観だけを取り扱うならば，それは「博物館」となり，生き生きとした景観にはならないであろう。

このように農業や農業景観には，過疎化と農業そのもののもつ環境影響という課題がある。これら二つの問題は無関係に存在しているのではなく，大量生産，大量消費という価値観が農業を変化させ，その価値観に土地条件的に適応しにくい中山間地域が過疎化していると考えられる。持続可能な農業が競争力を持つような社会を実現できれば，これらの問題は同時に解決できるのではないだろうかというのが，本特集の発端にある。

そのため，総説では日本の農業政策の変遷を景観や環境の観点から概観し，持続可能な農業と消費についてその現状を概観した。論説では持続可能な農業に舵を切っている EU の共通農業政策をはじめとする制度や仕組みについて紹介した。つづいて農業生産の場から消費のあり方までを概観できるよう事例を集めた。

造園学会設立に大きく寄与した上原敬二は，1922 年に雑誌「文化農報」に寄稿し農業景観について述べている。農業者が収益を優先するのは理解できるがそれでは風景は崩れていくといい，問題解決策として「区々たる一二の専門研究を捨てて産業をお互いに研究し合う時，其処に又面白い地力の利用法がありはしまいか」と，関連する他分野との連携の必要性を提言している。上原の言う他分野は農業や観光であったが，100 年近く経った今，環境問題も登場し状況はさらに複雑化している。そのため他分野の研究はさらに必要性を増しているであろう。本特集ではあえて非会員のかたに多く執筆していただき，関連他分野の情報を参照できるようにした。ここから持続可能なランドスケープにとって新たな発見や気づきが生まれることを期待したい。

真田純子（東京工業大学　環境・社会理工学院）
（編集担当：真田純子・土屋一彬）